元禄惜春譜

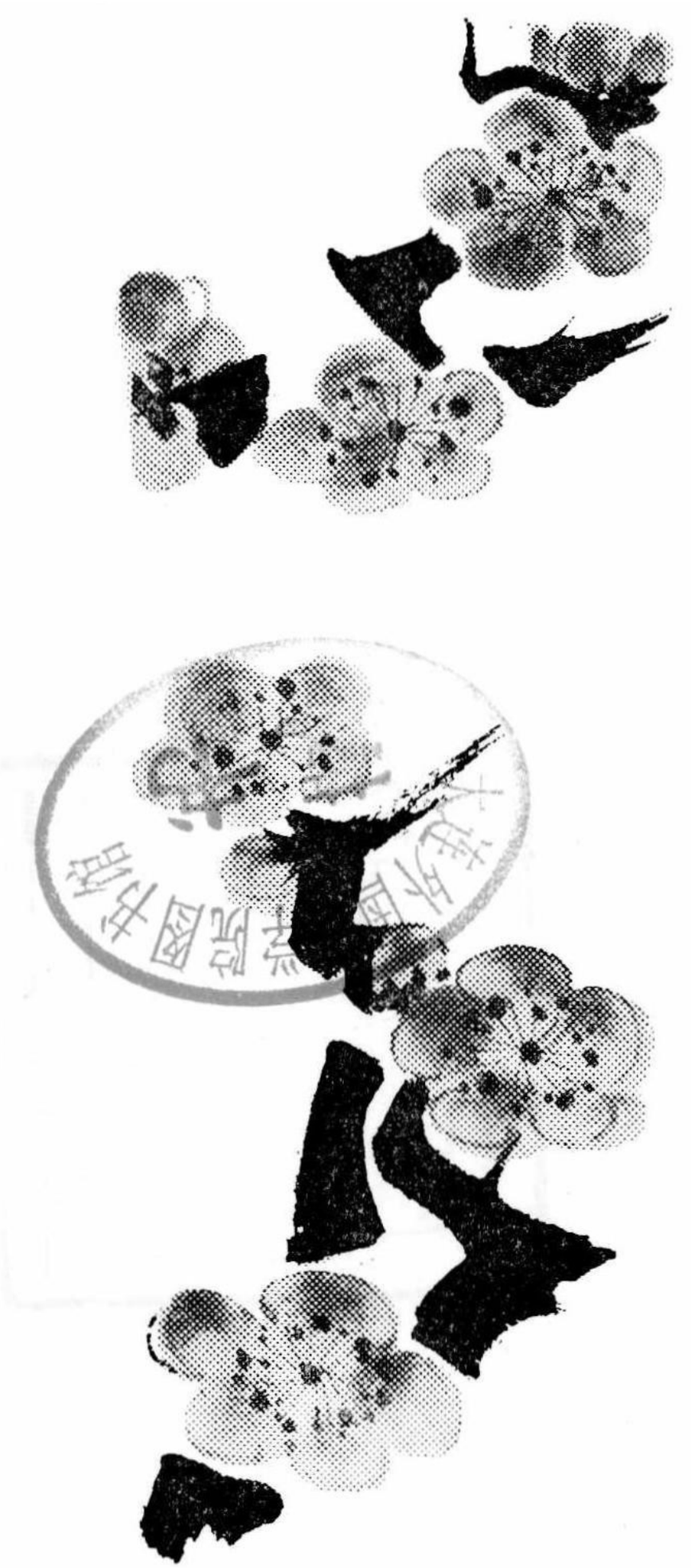
元禄惜春譜

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

元禄惜春譜

——赤穂浪士銘々伝——

永岡慶之助



目次

落花薄桜の章……九
悲恋断琴の章……五九
紅顔旅愁の章……八四
父子望春の章……一二
紅心白心の章……一三四
残夢望郷の章……一五八
風鈴木枯の章……一八七

落花薄桜の章

――片岡源五右衛門――

一

その朝、辰ノ上刻ちかく大名小路から江戸城大手前へかけての往還は、折しも、ぞくぞくと登城する諸大名の行列が輻輳し、槍や鋏箱によって、まさに埋めつくさんばかりに見受けられた。

そして、つねには無い、在府諸大名の総登城という、物々しくも綺羅びやかな景観が、流石に、人びとの胸に、ただならぬ昂奮をよんだものであろうか、厳粛なる気配のうちにも、目に見えぬ熱気めいたものが、濛々と烟りのようにたちこめていた。

いま、播州赤穂の城主浅野内匠頭の一行もまた、そうした諸家の行列のかもしだす、異様なまで熱っぽい波の中を進んでいた。

だが、絡繹とつづき、いつ終るともしれぬ、諸家の供揃えのほとんどが、この、元禄というさかんなる時世に酔い、金紋、先箱の美装を競いあっているかと見られるなかにあって、ひとり浅野家の行列のみは、奇異なまで緊迫した空気を感じさせた。

（暗い――！）

片岡源五右衛門は内匠頭の駕籠側にあって、思わずそう心につぶやいた。

濠の水も、松の緑も、彼の眸には、妙に沈んだ色に見えるのだ。

この日、元禄十四年三月十四日の、朝から底冷えするほどの曇天は、昨日の曇り空、いや、その前日の雨天から尾を曳いたものであった。それにしても、花曇りというには、あまりにも光の薄い、陰欝な空模様であった。

（疲れたせいかも知れぬ）

と源五右衛門は思った。彼は視界の小暗さを疲労のせいとし、天候のせいとした。

そのときであった。前方、馬場先門の上空を、ゆるやかに旋回していた一羽の鳶が、いかなる餌を発見したものだろうか、突如、一塊の黒点となって、杜の中へ落下していった。

『あ』

瞬間、源五右衛門は、小さく叫んで足をとめた。

『片岡殿、如何なされました？』

そう声をかけたのは、磯貝十郎左衛門であった。眉を曇らせた彼は、いかにも気遣わしげに、

『何か――』

『いや』

源五右衛門は首をふり、

『仔細はない』

とこたえて微笑んでみせた。頬のこわばりが感じられた。

『しかし』

と十郎左衛門は、源五右衛門の顔をのぞきこむようにして、

『お顔の色が、随分と青う見えまする』

『心配ない、持場へ戻られよ』

『は、では』

十郎左衛門は、ちょっと躊躇したが、その場所でないと思いかえしたか、会釈をして二足、三足ほど行きかけてから、低い早口で、

『今日一日限りで御座る、どうぞお体を――！』

といい、ひらりと身をかえした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

『今日一日か――』

源五右衛門は、唇を噛みしめた。

確かに、十郎左衛門のいうがごとく、今日という日を無事に過ごすことができたら、笑いを喪失した主君内匠頭にも、打ち沈んだ浅野家にも、ふたたび、のどやかな春の光が戻ってくる筈なのだ。だから、

(何卒、無事に今日の一日を!)

とは、浅野家中の心からなる願いであったのだ。

しかし、落下する鳶を目にした一瞬、源五右衛門の脳裏に浮かんだある光景が、そうした希望を嘲笑するように、不吉な翳りをおび、ふりはらってもふりはらっても、しつこくまとわりついて離れぬのだ。

それは、あるじ内匠頭に、勅使饗応のことが命ぜられた直後のことであった。一日、源五右衛門は、磯貝十郎左衛門と連れだち、芝愛宕山社に詣でた。主君が無事大役を果たされるよう祈願するためであった。

勅使饗応役というのは、毎年正月、将軍から朝廷に贈る金幣の答礼として、京都から勅使、院使が江戸に下向するのがならわしとされているが、すなわち、この勅使の馳走接待のことをつとめる役目がこれで、今年は、勅使饗応役が浅野内匠頭、院使饗応役に、伊予吉田の藩主、伊達左京亮宗春が命ぜられ、接待の指南役には公家の儀式に精通している高家衆筆頭の吉良上野介義央が当てられた。

そして実は、内匠頭が、勅使饗応役をおおせつかったのは、これがはじめてではなく、天和三年十七才のおり、江戸家老大石頼母の補佐をうけ、人も同じ吉良上野介の指図のもとに無事大役を果たしている。

だが、無事大役を果たしたとはいえそれはいまの国家老大石内蔵助の縁につながる頼母という練達の

後見あってのことであり、その点、現在の江戸家老安井彦右衛門ならびに藤井又右衛門はあまりに凡庸に過ぎる人物であると言える。

源五右衛門、十郎左衛門の両名が、愛宕社参詣を思いたったのも、有体にいえば、安井らに不安を感じたからに外ならない。

さて、参詣を済ませた源五右衛門等が、境内の茶店に足を休め、茶を喫しているときであった。ふと見ると、老杉の一枝に白鳩が羽を休め、ル、ルと咽喉を鳴らしていた。

『可憐なものじゃのう』

源五右衛門は、茶湯を口にふくむことも忘れ、眸をほそめてふりあおいだことだった。

十郎左衛門も、それと気付いてにと微笑い、

『どこぞに鳴き声がすると思うたら、あれにおりましたか、それにしても、祈願参詣の戻り道に、白鳩を見るとは——』

とまで言った一瞬、黒点となって飛来した猛禽が、さっと鳩をひき掠った。鷹であった。キーッという鳩の悲鳴が人影まばらな山内にひびいた。

『鳩めが、また悪いやつに摑まったようですね。可哀そうにチョイチョイやられるんでございますよ』

茶店の老婆が、目をしょぼしょぼさせながらいった。

『……』

源五右衛門等は、無言であった。鉄砲州の上屋敷に戻ってからも、二人はこの話に触れようとしなかった。

このときの事を、源五右衛門は、いま、落下していった鳶を目撃したことから、こつぜんと連想したのである。あの哀しげな悲鳴とともに。

不吉とは、このことであった。いやな予感があった。事実、予感を裏書きするように、その後の、主君内匠頭と吉良上野介の間は、ことごとに狂いを生

じてきたのである。

歯車の狂いは、やはり、安井、藤井両家老の凡庸な手腕にあったといえる。

一体、勅使饗応役を命じられた大名は、指導役の吉良上野介へ、相当な音物を贈りとどけるのが、これまでのならわしとされてきた。むろん、かつての大石頼母もそうしたことであろうし、それ故に、つつがなく大任を果たすことができたものともいえた。

安井彦右衛門は、この点を安易に考え流したということができる。

『先に饗応役を仰せつかった天和三年のおりには〆て四百両あまりで事がすんだが、諸物価上りの当節ゆえ、とンと目算がたたぬ。それで試みに、四年前の元禄十年に饗応役をつとめられた、伊東出雲守殿御家中に問いあわせたところ、千二百両ほどかかったよし申されてある。むろん、伊東家以上に費用をかければ、文句ないわけじゃが、当節は、お家の勘定方も苦しいおりである。そこで半をとって七百両ほどに致す所存である』

安井は、いかにも妙案だろうと得意な表情だった。この安井の所説を支えたものに、『万事軽く』という老中からの触れもあった。

とにかく、安井は藤井又右衛門と同道し、吉良家へ形ばかりの贈物をもって、饗応役就任の挨拶にいったのである。

『万事、軽く参るのじゃ』

安井には、自分の手腕を誇る風さえあった。

『これは危い』

と源五右衛門はそのとき思ったことである。

賄賂が公然とやりとりされ、罪悪視されなかった元禄の世、しかも相手は、朝廷と緊密な関係にある高家衆の筆頭であり、音物を殊の外に好む人物として聞こえているのだ。たとえ饗応役指南のことは、

高家として当然の勤めとはいえ、安井等の取りはからいは、あまりにも時の流れを知らぬ致し方だと思わぬわけにはいかなかった。

この思いは、磯貝十郎左衛門も同意見であった。若い彼は、いかにも歯がゆくてならんといったていで、

『藤井様が、江戸の世情に暗いのは是非ないとしても、江戸定府の安井様がこのようでは、この度のお役、安心がなりませぬぞ』

とまでいって嘆いたことである。十郎左衛門が、

『藤井様は是非ないとして』といったのは、藤井が内匠頭に従い、出府してきたばかりの者だったからである。

はじめ、源五右衛門と十郎左衛門が、

『この音物では、僅少に過ぐるやに思われます、金子をお贈りしては如何でしょうか』

と勧めたさいも、安井は、さも『差出がましいことを』といった色を見せた。

これは、源五右衛門が、尾州から赤穂の片岡家へはいり、児小姓から、またたくまに、三百石取りの内証用人兼小姓頭にまでなった者であり、また、十郎左衛門はといえば、赤穂の譜代ではなく、旗本の家老の家に生れた江戸ッ子である。幼少の折りから能を学び、殊に鼓、琴の名手で、書をよくした。十四歳のとき、堀部弥兵衛の推挙で、愛宕山坊教学院において内匠頭に拝謁し、そのまま児小姓にとりたてられた。類なき美少年だったためもあるが、生まれつきの悧発と誠実な人柄が、内匠頭の鐘愛をうけ、二十三歳になるこの年には、すでに百五十石どりの物頭並にまで出世した、赤穂藩切っての出頭人である。

（こ奴めらが）

という思いが、安井等にはどうしてもあるから、家老職の威厳をふくんだ物言いで、

『そこもと等、わたしの裁量では心許ないと申すのか』

『いや、左様ではありませぬ。ただ――』

『ただ何うしたというのじゃ』

『は、ただ、かような些細のことから、吉良殿の機嫌を損じ、若し万が一にも、殿のお役目に支障をきたすような大事にならねばと案じた次第に御座りまする』

『むむ』

瞬間、安井はギクリとした。これまで彼は、出費を少なくすることで、自己の手腕に満足をおぼえていたが、いま、源五衛門の口からいわれてみると、確かに『万が一』の不安がないわけではない。そして、この場合の『万が一』は、取返しの利かぬ事態を招きかねないのだ。

流石に、心配になった安井が、急いで伊達家のほうの様子を探ってみると、これは絹に黄金百枚、そ

れに狩野探幽の双軸を進物にしたことが判明した。
『黄金百枚！』
安井は唸った。
三万石の伊予の伊達家がこれである。富裕と定評のある赤穂五万石の浅野家が、絹一台は何としても少な過ぎる。
狽狼した安井と藤井の両名は、伊達家の例をあげて、
『金子を贈っては如何でしょうか』
と内匠頭に相談した。
『金子を贈ると申すのか』
内匠頭は、安井の話を聞くなり、眉根に不快のいろを浮かべ、
『無用じゃ、伊達家は伊達家、わが浅野家には浅野家の家風というものがある筈だ。さようなことまでせずとよい』
といい捨てた。
重ねて安井は誤ちを犯したといってよい。内匠頭は、九歳にして藩主となった者で、いわば世間知らずの箱入り大名である。加えて、潔癖、直情の性情から考えて、ここは家老職にある者の独断をもって事を進めるべきであった。
ともあれ、これで、源五右衛門等の忠告も水泡に帰してしまったわけである。そしてその後の成行きは、予想したごとく、継ぎとめようもない亀裂となって、内匠頭の上にのしかかってきたのだ。期待を裏切られた上野介が、事々に内匠頭につらく当るようになったのである。
三月十一日、勅使、院使が江戸へ到着、ただちに辰ノ口の伝奏屋敷へはいった。源五右衛門のおそれていた事態は、その夕刻、早くも思わぬ形で襲ってきた。
『上野介の指図によって、伊達家が御宿坊の畳替えをした』

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com